



最寄り図書館に取り寄せ可

## アラブ近代思想家の専制批判

オリエンタリズムと〈裏返しのオリエンタリズム〉の間

岡崎 弘樹／著 東京大学出版会 2021.1 発行

定価 8,400 円＋税 7,289,82p 22cm 313.6/ネ 11 2021.3.12 受入

### 目次

- 序章 問題の所在——独自性論批判
- 第一章 独自性理論の背景——ナフダ第一世代までの専制批判
- 第二章 ムハンマド・アブドゥにおける二つの認識体系——「公正な専制者」の概念の再検討
- 第三章 観念化する専制批判——アラブ亡命知識人の源流
- 第四章 アディブ・イスハークにおける自由と専制主義——新しき政治規範と抑圧のシステム
- 第五章 進化論アプローチによるアラブの専制批判——シブリー・シュマイイルの思想を中心に
- 第六章 アブドゥッラー・ナディームにおける〈金持ちの専制〉批判——国民的団結を求めて
- 第七章 『専制の性質』再考——西欧の影響とアラブの共通精神
- 結論 ナフダ時代の専制批判から学ぶもの

### 資料概要

本書は、近代のアラブ人知識人が、専制支配をめぐるいかなる議論を繰り広げてきたかを考察した1冊である。

副題に挙げられた「オリエンタリズム」と「裏返しのオリエンタリズム」とは、過去に行われてきたアラブ・イスラーム世界の専制支配に対する二つの主なアプローチ、西洋人による東洋専制主義論と、アラブ人論客による文化主義的アプローチとを指している。アラブ・イスラーム世界における専制支配の不可避性はそのいずれにおいても強調されてきたが、この「間」で欠けているのは、近代のアラブ人思想家による専制主義をめぐる思考と応答のあり方に対する考察だと著者は考える。

本書では、1870年代後半から20世紀初頭にかけて活躍した「ナフダ（復興）第二世代」と呼ばれる思想家たちが、いかなる時代状況や社会認識を下に専制支配を語ったかを、膨大な資料を基に、①認識の歩み、②共通の努力、③比較的読解の、三つの視点から議論する。アラブ人自身が特定の歴史的文脈の中でどのような観念を獲得したかを当時の認識体系に基づいて追体験することで、彼らの普遍的な貢献や多くの知的努力を発見し、評価しようとするものである。

### 著者紹介

岡崎 弘樹（おかざき、ひろき）1975年、広島生まれ、一橋大学社会学部を経て2016年にパリ第3大学アラブ研究科博士課程を修了。社会学博士。日本学術振興会特別研究員（PD）。京都大学、大阪大学ほかで非常勤講師。専門はアラブ近代政治思想、シリアの政治文化研究。

**本**紙は、県立図書館が新たに所蔵した資料（図書資料・視聴覚資料）から、ぜひご利用いただきたいものを厳選してご紹介するものです。これらの資料は、禁帯出資料を除き、最寄りの図書館に取り寄せできます。

なお、本紙の内容はWebにも掲載しています。ご覧の際は右のQRコードをご利用ください。

また、内容の誤り等、お気づきの点があればお知らせくださるようお願いいたします。

